稽古談 巻の一 要約

22011326

今日、政治の話をするとき孔子や孟子の言葉から稽古をするが、孔孟の時代と今日では状況が違うため政事を論じても議論は合わない。治世に利は捨てるべきではなく、民は愛しすぎるべきではない。今の時代に孔孟の時代を基準にするべきではない。

田も山も海も金も米も天地の間に存在するものはすべて経済的財貨である。これがさらに経済的財貨を生むことは理である。

民を愛するということは民を勤勉に働かせるということであり、税を必要以上に取ることはもちろん、必要以上に取らないでいるべきでもない。

国は政治が理にたがったことがあると貧しくなり、政治が合理的であれば民も自然に合理的な行動をするようになる。しかし、江戸の民は武風であるため民は言うことを聞かない。そのため民が恐れるように酷吏になることは道理である。

財政状態が悪くなる、法がくずれるのは目付役と元締め役少ないためで、江戸は諸国と比べると少ない。しかし、これらが内々で法を崩すことは制しようがないため吟味して選ぶべきであり、潔白なつとめかたをしなくてはならない。

町人が富むのは格式が低く財貨が多いからである。格式と財貨が釣り合って入れば資産は一定になる。格式を与えるということは一部の町人のところに金銀が集まりすぎないようにするため金持の町人を貧乏にする仕組み。格式を与えられると用人や家来が付くため自然に利に疎くなる。格式があると上の賜物を有難くいただくという気持ちを見せるために金銀を散ずることになるため後藤庄三郎と後藤縫殿助は幕府から格式を与えられて貧になった。

国が貧乏になるゆえんは自分に勝る他人を妬むこと。武士は町人の富を妬むが役人はみな武士であるため町人を苦しめることが世間一般の気風になっている。富む者は出精し勉励した結果であり貧乏な者は懶怠である結果。出精するものを憎むのは土地から生産するものを減らすことになる。

そもそも武士は物を売らないという考え方はおかしい。この武士が物を売ることを恥辱とするがこれは偏見であり、これによって万事ちぐはぐになっている。物を売ることは恥辱ではない。金を借りて返さないことのほうが恥辱であるのに武士はこれを恥辱としていない。武士がものを売らないから国に財貨が増えないのである。武士が正しい考え方をするようになれば国はすぐに富む。